

昭和  
和和  
二十四年  
四十六年  
十七  
月二十三  
日  
第三  
行三種  
（每月一  
回）  
（便物認  
可）  
（十五日  
發行）

（通第二六九号）

# 慈光

第二十三卷 第十号

## 次

聖人に親炙して……………	池山栄吉……………(1)
懺悔録(二)——予が信仰の経過……………	近角常観……………(8)
業と縁……………	福島政雄……………(14)
念仏詩抄(五)……………	木村無相……………(17)
師弟一味……………	花田正夫……………(19)
円朝忌に思う……………	聚墨生……………(23)

## 目

# 聖人に親炙して

池山 栄吉

(註) 昭和六年一月に芦屋仏教会館で池山先生が御講話されたのを、故野間兄が清書して残して下さったものであります。兄が生前に聞法精進のあとを偲び、よき師の仰せを信味体得せんと真剣であったことに感歎、胸せまるものがあります。

(井上善右エ門 記)

信仰は若いから得られない、老人だから得易いというこ  
とはない。男女老少を問わず信仰は得られる、しかもまた  
得にくいものである。

私は皆さんにお尋ねしてみたいと思う——皆さんはこの  
仏教会館の設立の趣意である信仰をえられておいでですか  
皆さんは開祖親鸞聖人に直にお会いになったことがありま  
すか、聖人は七百年前の方だからお会いできないと云われ  
るのではもの足らない、是非お会いしなければならぬ。信  
仰は信ずる人とお会いするということである。信仰の道を  
辿っている以上は、一度は聖人にお会いしなければならぬ  
そうでなければ信仰は得られない。ではいかにしてお会い  
できるかをお話してみましよう。歎異抄の第一節を拝読し

てみますと、

〃弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば  
遂ぐるなり〃と信じて〃念仏申さん〃とおもいたつ心の  
おこる時、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもう  
なり。弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、た  
だ信心を要とすと知るべし。その故は罪惡深重、煩惱熾  
盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば  
本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさる  
べき善なき故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願を  
さまたぐるほどの悪なきが故にと云々。

〃その故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがため  
の願にてまします〃第一節を拝読すると、頭にピンとくる  
のが今の一句です。これが即ち弥陀の本願、本の御希望で  
ある。

吾等が親鸞聖人にお会いしたいという希望がどうして湧

くのか。別にわけはないが、信仰を獲ておいた方がよいか  
らというのではつまらぬ。それでは信仰を与えたくとも、  
与えられない。何が得られなくとも、先ず信仰が獲たいと  
いうまでに願望が熟して来なければ駄目である。七百年前  
の人に会いたい——これ奇蹟である。何故に会いたい。も  
とも弥陀の本願は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけん  
がためである。罪惡深重、煩惱熾盛の自分に苦しむ人は会  
いたくて仕方がない。言葉通りそれだというよりも、その  
言葉に盛りきれぬほどに罪惡深重にくるしむのである。  
そう考えると聖人にお会いなさったかという間は〃貴方  
は自ら罪惡深重、煩惱熾盛という見極めがついていられま  
すが〃と言い換えることができる。如来は吾々に信仰を与  
えたくて仕方がない。だが如何せん吾々の方で欲しがって  
いないのだから獲られないのである。

それで今度は吾々人間は、どうしてもそうした自覚を余儀  
なくされるものであることをお話しておきましょう。

私が聖人にお会いしたその体験から割り出してお話する  
と、我々は常に満足をもとめている。

然るにいつも満たされない望みがあって、それがかなわ  
ぬ——そこから苦しみがおこる。一生もがいて努める、ど

うぞ自分の望みをかなえたい、満足を得たい——吾々のす  
ることなすこと皆この欲望から来る、その外に何も無い。  
金を得たいと云う人は一生懸命にそれを求める。そして  
運よく金を得る人がある。名の知られる人となりた、う  
まくいけば、かなり有名にもなれる。其他地位を得たい、  
権勢が得たい——いずれもある程度まで得られましょう。  
併しそれらが得られて満足しきって居られるか。かつて自  
分の望んだことを得て、それで究竟の満足を得ている人が  
あるか。

中には眞の満足でないものを、満足だと自らあざむいて  
いる人もある。正しい方法によらないで、満足を得たとい  
う人は大抵これである。

普通の満足と、もう一つの満足とをくらべてみる。

自己をよりよくしよう、外のもので自分を飾ろうとする  
のでなく、自分の人格をよくしようとする。そういう満足  
と前の満足とをくらべて、どちらが貴いものであろうか。

人も二十歳前後にもなれば幾分そうした問題を、経験的  
に考えて居られることであらう。財産や地位よりも、自分  
の人格が向上している、という満足を感じるに越した喜び

はない。両者は到底くらべものにならない。人格の向上を実現することが出来たならば——自分の欲するままに善でありうるようになれば、これにこした真の満足はない。その他の満足は従たる満足で、内なる自分をよりよくするための手段としてのみ、外なる満足は意味がある。間接に内なる満足を得るに役立つ、という点においてのみ価値がある。

昔から道を求めた人々は、自分を一步でも仏の境涯近づけたい、という願いに専念した。内なる満足を求めるときのみはじめて人間としての道を歩むのである。親鸞聖人はそれを専ら求められたのである。

ところでそれがうまくいくかと云うのが問題である。第二節に、

〃念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべるらんまた地獄におつる業にてやはんべるらん、総してもて存知せざるなり〃たとい法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にもおちて候わばこそ〃すかさされたまつりて〃という後悔も候わめ、いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。とある。

聖人は向上の一路に専心ころをばげまされたけれどもとても登り得ない道であったと。遂に〃とても地獄は一定すみかぞかし〃〃まことによくよく煩惱の興盛に候うにこそ〃となられたのである。

真の満足を求め進んで、それが達せられない。そこで始めて罪悪深重、煩惱熾盛の衆生ぞとの教えに入られたのである。真面目に人生を渡ろうという人は、おそかれ早かれそこにぶつからざるを得ない。

人に出会う度に礼拝された人がある。常不輕菩薩（じょうぶきようぼうさつ）という方である。その人はどこを見てそうしたのであろう。例えば私が人に対してそうすると、他から見て狂人のようである。石には精神があるかないか分らないが、恐らくないであろう。鳥、鳥にはありますね。住吉の御影に住んでいた時分カナリヤを飼っていた。私がそばへ行くとチウチウと嬉しそうに鳴く。はてなと思つて近づくと、さも嬉しそうにピョン／＼ピョン／＼はねまわって鳴く。私は餌をやったことはないが私に対して親しみを持っている。私も可愛い奴だと思つ、心と心が通うのである。

かつて猫のお話をしたことがある、猫にも心がある。犬にはなおさらである。しかしあれが欲しい、これが欲しい

という願はあるが、心をよくしたいという願は人間にしかない。この心があるので始めて人間である。地位、財産のみを願っている人は、人間の人間たる価値がない。人間としての真の価値は自分の心をよりよくしたい、仏にまで近づけたいという心がある点にある。常不輕菩薩が礼拝されたのは人がそういう心を持っているからである。

人格を向上したいという願は本当に貴いものだ。吾々と仏との間には五十二段もの階段があり、非常なへだたりがあるが、いつか一度は仏に辿りつく可能性がある。それが貴いのである。如来が吾々を救おうとされるのは、吾々をよくになりたいという心を手がかりとされるのである。一切衆生悉有仏性（しつうぶつしやう）とはこれである。

それから、信仰を得るのに絶対に必要とまでは、純理の上からは云えないかも知れないが、事実上そうでなくてはならないのは善知識に会うということである。信仰上絶対に信頼し得る人を獲ることである。

その善知識は現に生きている人でもよい、貴方がたの中の一人が善知識であるかも知れぬ。又百年前の人でもよい三百年前の信者の言行に感じて、その人が善知識になるとしてもよい。

私の善知識は誰か、私を信仰の方へ近づけてくれたのは母や、友人、あの近角常観という人などであるが、信仰に

引入れて下さった直接の人は、七百年前の親鸞聖人である。

七百年前の人にどうして会えるのか。私は貴方がたに質問します。——貴方がたは人間を見ることが出来ますか。出来るという人は、まだ人間を知らぬ人です。人間は眼に見えるものではない。鼻があり、口があり、しかじかの形をしている、それは人間ではない。或事を感じ、欲し、考える、それが人間である。七百年前に親鸞聖人の前に坐つたとしても、聖人を拝める人もあるし、拝めない人もある。

聖人の御心の幾分を解し得て、そうでしたか、私もそうさせて頂きましょう、となれた人が聖人にお会いした人である。七百年後の今でも、心と心と通って、直かにお会いできるのである。信仰の上で心と心とが通う——それが信仰である。聖人を通じて、法然、善導、天親、龍樹、釈尊、十劫の昔からの弥陀仏と心の通うことが信仰である。

然らばどうしてお会いしたか。

私は元來偏屈にできている。疑い深い、意地が悪い、絶対に人を信ずるといふことができない性分である。若い時分から英雄崇拜などということが出来なかった。ところが妙なことには、宗教というものは馬鹿に出来ぬと考えていた。宗教の中でも仏教、仏教の中で殊に真宗の信仰が最も純粹で、すべての信仰を、つきつめていった最高のもの、という考えは動かさなかった。他のことには疑い深かった

が、真宗の信仰の体現者は親鸞聖人であり、聖人がその信仰を体験されたままに述べられたのである、ということには疑えなかった。

私が出にくかった念仏が出たのは四十二歳の時である。私の行詰りは、善悪の問題であった。人によってはいろいろあるが、私にはさっきの善悪の問題である。或事で自分がよくなりたいと思いつつ、よくなれなかった。悪いと知りつつどうすることもできない。私はわが心を自由にすることができない。

目的のない人生、これほど淋しいものはない、自分はどうしたらよからう、何のために生きているのだろうか——五里霧中、足を踏み立てる所がない、生きていかれたものではない。

私はその時、こうした時に信仰が欲しいなと思った。どこにも光が見えない、まっくらがりだ。切に信仰が求められた。その時、第二節の親鸞におきてはの御文を思い浮かべた。それまでに読んだり聞いたりしていたが、体験的にそうだなと思っていなかった。その御文は、

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の

さつきカナリヤのお話をしたが、カナリヤが私に呼びかける。私はカナリヤが私を呼んでるなど感ずる、これが感入である。皆さんの中で、大変真面目に聞いておられる方がある。喜んで聞いておられる方がある。私の方で、あの人は真面目に聞いていられるな、あの人は喜んで聞いて居られるなど感ずる。心と心が通ずるのである。

じゃあ死んだ人とはどうか。死んだ人は、多くの場合、言葉そのものがその人である。その言葉を聞いて「じゃ私も」とその言葉を真似するのである。その言葉の中に入るのである、それで与えられるのである。

聖人のお心が私の心になり、逆にまた妙な言い方ではあるが、私の心が聖人の心になる。感入であり、共感であり共鳴である。「ただ念仏して」いかにもそうですね。煩惱熾盛、罪悪深重の衆生をたすけたいための願でしたか、南無阿弥陀仏」となる。

念仏の出ない人は御用心なさい。しかし念仏が出たからとて、信心を獲たのでないかも知れぬ。聖人の御心が私の心になり、私の心が聖人の心になると、念仏せずにおられなくなる、不思議なものです。

聖人を真似るのに二通りの仕方がある。聖人が仏前で如何にもつつましく合掌念仏しておられるとする、そのお姿

子細なきなり」(二回拝誦さる)

よきひと——即ち善知識である。それ、ここに信仰にはいる献立がちゃんとしてきている。おのれのなんともならぬ身ということ、そしてまた「よき人の仰せをこうむりて」という善知識の準備ができている。聖人は私にとって善知識である。私はその御文に、グッと引きずり込まれるように感じた、その途端ああそうかと感得したことがあった。

聖人は「親鸞におきては」と云っておられる。「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをこうむりて信ずる外に別に子細なきなり」「あなたはそのようにしたか、じゃ私もこの骨です。この心持であの御文を味わわれれば、現前当来(げんぜんとうらい)遠からず、必ず聖人を拝見できます。

「私におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人、親鸞聖人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」とすると今まで取かしく出ていくかっただ念仏が土堤(どて)の切れたように出てきた。それまで自分は信仰家をもって任じていたのにお念仏が申されなかった。その時はじめて親鸞聖人のお心かわかった。わかったのは「ああそうか」ということである。

を真似して自分も合掌念仏する。これは外的の真似方である。「ただ念仏して……」というお言葉を頂いて自分も聖人と同じ心で念仏する、これは内的の真似方である。外的の真似をしておれば、いつか内的の真似もできるようになる。このことについては、もっと詳しくお話ししたいが時間がないので次の機会にゆずりましょう。心理学上から云っても、絶対に信頼する人の判断は、そのまま自分の判断となり、その人の希望は自分の希望となるということは動かせない。

聖人を絶対に信頼すれば、おのずから自分の中は空っぽになる、その人の考えを聞かしてもらえば、それがそのまま自分の考えとなる。かくて始めて聖人にお会い出来る。聖人にお会いすることは法然上人にもお会いし、善導、天親、龍樹、釈尊にも会い奉るのであり、現に如来を拝見することである。

願わくばすでに信仰を獲られた方はしばらく措き、未信の人は是非とも聖人にお会いしていただきたい。お会いするには「じゃ私も」「私におきては」など、上にのべたことが参考になるでしょう。

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいら

すべしとよきひとの仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり〃

というのは単なる信仰の告白ではない、単なるひとりごとではない。

〃私はこう信ずる、貴方がたもこうしてはどうかな〃とお勧め下さっているのである。これは最近気付いたことである。信仰の告白には一種異常な力がある。これは痛切に感入をうながす。だからあの御文は獲信のうえに絶大の加威力を有する。あの御文は熱い思いをこめてのおすすめであるといただかねばならぬ。

七百年前から呼んで下さっていた御声に気づかなかつたのは、私共の求め心が切実さを欠いていたからである。どうぞ一刻も早く〃あゝそうだったか〃と共鳴するところに落着いて頂きたいものです。

「仏と人」より

### 冬の言葉

高村光太郎

冬がまた来て天と地とを清楚にする。

冬が洗い出すのは万物の木地。

天はやっぱり高く遠く  
樹木は思いきって潔らかだ。

虫は生殖を終えて静かに死に、  
霜がおりれば草が枯れる。

この世の少しばかりの擬勢とおめかしとを  
冬はいきなり蹂躪する。

冬は木枯しのラッパを吹いて宣言する、  
人間手製の価値をすてよと。

君等のいじらしい誇りをすてよ、  
君等が唯君等たる仕事に猛進せよと。

冬がまた来て天と地とを清楚にする。  
冬が求めるのは万物の木地。

冬は鉄槌（かなしき）を打って又叫ぶ、  
一生を棒にふって人生に関与せよと。

一九二七、一二月

## 懺悔録（二）

### 第三章 予が信仰の経過

私は幼い時から仏陀を礼拝し、経典をも読み、又宗旨の学問の片端をもうかがいました、が、その後東京大学に入學しました。自分は性来慷慨（こうがい）するのが好きな性質であったから、同じ学生の中で宗教のことを互に語り互に論じなどしたものでありました。従って色々の宗教的催しもしてみました。

今から十三年前、東京の高等中学（旧一高）にいた時、諸学校の生徒達と相談して、はじめて仏教夏期講習会をおとしました。これからして青年学生間に、宗教を求めることがはじまったように思われる。それ程であるから自分は随分熱心に仏教のためにするつもりであった。

しかるに九年前、明治二十九年から三十年にかけて、身はなお学生でありながら学業を抛擲（ほうてき）して宗教のために奔走することになって、随分心神を勞しました。全体この事件は着手するとき、ことによると一生涯学問をやめてしまわねばならぬかもしれぬと決心した位であっ

### 近角常観

た。そして三十年二月二十日に帰京して、やれやれと安心したが、それから身体が無暗に疲れて、心が何となく苦しくなってきたが、はじめは自分でもそのわけが解らなかつた。そうしているうちに、朋友同志がどことなく仲の悪いのが苦になって、どうかして人間が飽くまで仲よくしあうようにしたいと思つて、右に善くし、左に順（したが）い、彼を慰めこれを導き、色々と出来る限りの心配をしよと、大奮発でやりかけてみた。

ところが世の中は、どうも思うようにいかぬ。一家の人の心持から、社会の上にいるまで、左に聴けば右にをむき、甲に善くすれば乙にうらまれる。どうしても皆が一処に心がまとまらぬ。そこで他人を不足に思うてきた。人はなぜかくも勝手であるか、自分が思うように世界がいかにぬ、こう思うてくると、益々世界が悪くなつてきた。

生来自分は人に対してへだて心になかったのに、妙に人を疑う傾向が出来て、自分はこれほどまでに人に親切にするのに、先方はなぜあのように悪くするであろうと恨んだ

り、人々の間柄を調和しようと心掛けた自分が、遂には自分からへだてたり恨んだりすることになった。右に對してもいよいよ善くない、左に向つても益々悪くなって、はては世界中の人を、誰を見てもイヤになつて来た、この時の心持を、今いおうとしても云えぬ位である。しかし、この如き煩悶は私ばかりでない。かかることは世の中に、大なり小なりある事柄であるから、何人も自らかえりみれば解ることである。

かれこれしているうちに、四月八日、釈尊の降誕会となつた。その前の晩に、人が翌日をたのしんで色々話をしてゐるのが、私にはすこしも愉快でなかつた。このようにはじめの間は人を善くしようとしたのが、ついに自分が悪くなつてしまつたが、それでも自分では、世の中のものどもは如何にも不真面目である。自分は真面目で一寸の際がないと考へて居つた。

こんな時には書物を読んでも、教場へ出ても一向面白くない、むしろ解らない。唯々人生のことを氣にして、考へてばかり居つた。こうなるとあらゆる悪い心は皆おこつてくる。今まで仏教を喜んだのも何にもならぬ、仏様も一向あり難くない、友人にも見離される、いかに愛読の書物でも一向味がない、すべてのこと何を考えても心を慰めることは出来ない。わずかに食うたり飲んだりする上に少しは

動かすに足り、また同僚のうちでも至誠の心をもつて遇せられたに、今は人が自分を見ること土芥(どかい)の如くしているように邪推し、自分は宗教家でありながらこの有様は何事か、と自ら責め、前に安心立命して居るかの如く人に語つたのは、人に対して申訳がない、と悲しみ、終には、前にはかほどまでに色々尽力したが、千仞の功を一簣(いつき)に欠きたる如く悲しんでみたり、人が親切に慰めてくれれば、その親切に對して感謝の心がすくないと、自ら責め、甚しきにいたつては、人を感化すべき自分が、他人の感化をうけて、何の面目があるか、というよきな奇妙な考へを起し、又他人の病氣に對して、以前ならば疾く行きて看病をすべきに、今は非常に冷淡になつたかの如く考へられ、見るもの、聞くもの、皆苦悶の種ならざるはない有様であつた。

最後に自ら思うには、わが臨終近づけり、わが命すでに死せり、且精神的に人より殺されつゝあるにかかわらずなお菩提心の起らぬは何事ぞ、汝自殺せんと欲せば、すべからく男らしくこれを行へ。しかして自殺してはたして何れの処に往くや。かの善導大師の所謂二河譬喩の、往くも亦死せん、還るも亦死せん、とどまるも亦死せん、一種として死をまぬがれずといえる有様であつた。最後に、汝は自殺するか、もしくは破天荒(はてんこう)のことを為すか、二者そ

かりの味がある。そこで唯五官上に一時のたのしみを見出しつつある物質的の人物になつてしまつた。

人間が苦悶にある時、とかく墮落しやすいのはこの故である。決して無理ではないと思ふ。酒を飲んでは一時の氣をまぎらし、大言莊語して胸中のウツを散じようとするのは、是非もないことである。私はその時分には事によると人を殺すことも出来たか知らんと思ふ位、人を殺すのが恐しくないばかりでない、自分が死ぬことも何ともない。現に五月二十三日の晩は、自分が死のうかと思つた。この時の心の有様をありのままに懺悔して見るに、前には身を賭(と)して宗教のために尽くさんとしたもの、すこぶる小成に安んじ、小さなことを眼につけるようになったか、と悲しみ、また前にこういふ風にしたら善かつたと後悔して見たり、前には同情心があつたに、何故にこのような無情の人間になつたか、と愚痴をこぼし、人が自己をうとんじあるいはあなどるように考へ、前に東京に出てきたときは意氣天を衝くありさまであつたに、今のこの有様は何事ぞと悲しみ、わが枕頭に仏あり、聖教あり、しかして何ぞ心を安んぜざる、と悲しみ、故郷の父母兄弟を思つては、自分の挙動がいかに悠々としてゐるかに思われ、前には我心は天の如く大なりしに、今は何が故にかく井蛙(せいあ)の如くになつたか、以前はひとたび立てば人を

の一をえらぶべしと叫んだが、其夜の苦悶の極であつた。

昨年の藤村操という高等学校の生徒が「煩悶ついに死を決す」と云つたのは、実にひどいことなのであるが、あれも決して無理ならぬことと思われる。私はその通り煩悶苦痛の人間であつた。和讃にいわれる「苦惱の有情」であつた。悶え／＼苦しみ苦しんで、とても宅に居られなくなって、友人の宅へ逃げて行つたが、矢張り苦しくなつたままなんだ。自分の信仰が全く破れた。今まで人に信仰のことを語つたのが申しわけがない。自分にはどうしても安立の道がないから、時が丁度学年試験の前にさしたつたにもかかわらず、学校を廢めて座禅に出掛けようと思へた。全体私は、信仰が確かな間は、試みにも座禅するといふような氣がなかつた。しかし従来信仰が駄目になるや否や、学校を廢めて座禅しようと思ひ立つた。

すると親友の一人が引き留めて、是非共学校の試験をすませよ、君が学校を廢めるならば自分も学校を廢めて君と一処に行く、とかく云うて呉れた。自分のために友人にまで学校を廢めさせては相済まんと、思い直して、友人の助けを得て学校の試験をすませた。そうして國へ歸るまでに一つの苦しいことに出遇つた。それは彼の陸前の松島に開けた仏教夏期講習会に行くべきや否やという一事である。この講習会は前にも云うた通り、自分等が發起した会

合であるから、これまで一回も欠席したことがないのであるから、この時も欠席するのは非常に罪であると思うた。けれどもどうも人の中に行くのがいやである、苦しい有様を人に見られるのがいやである。世の中はいやであるが、義理的にやむを得ず思いきつて行くことにした。東京から仙台に行く汽車の中で、ただ無暗に煙草ばかり吹いて居て、同行の一人を苦しめた。

又松島に着いても、例年の講習会と全く気持が別であつて、第一多数の人の顔を見るのが何よりも苦しく、天下の美をあつめた松島の風景も更に面白くもなく、諸名家の講義を聞いても一向に解からない。まるで二週間というのは、友人に苦悶を訴えて、人をいじめ通した。

その時に、世の中に真実の朋友がほしい、如何なるときにも我を見限らず、満腹の同情をもって我を導く友人をほしいと、しみじみ思つた。而して尋常中学(旧制中学)の友人で、極く親しい人があつた。これは尾張の人である。自分はこの友人の処へ行って遇いたい、遇つて自分の苦痛を告げたいという考えであつた。後に聞けば、その友人が夢を見たということである。その友人の寺の玄関の前に一つの大きな蘇鉄がある。或晩に空中から黄色を帯びた火の玉が飛んできて、その蘇鉄の囲りを非常の速力をもってグルグルと回つたが、やがてポカッと消えたと思うと、私が

『徘徊解情(しいけだ)にして、あえて善をなし身を治め業を修めず、家室眷属(けんぞく)、飢寒困苦す。父母教誨すれば目をいからして怒りことう。言令(ごんれい)和せず、違戾(いるい)反逆す。譬えば怨家の如し、子無きにしかず』

これらの経説が、一つも他人のこととは思われなんだ。

しかし、それでも、どうしても仏様を、ありがたく拜むことは出来ぬ。日夜に泣き悲しんで一心不乱に仏に祈りて救われんことを求めたが、少しも何の感じもなく、泣きて涙出でぬような心持であつた。

九月になつては、どうも腰部が痛くて帯が出来ぬ。ついにルチユウという病氣になつた。この病氣は肉の下が膿むので、非常の痛みを起す難病でありました。それでも昼の中は、考えてばかりいたから、左程にも感じなかつたが夜寝ると七顛八倒の苦しみをした。私の弟が介抱をしていてくれましたが、私が眠ると知らず識らずヒュー泣き叫ぶのが、腹(はらわた)にこたえて、あたかも鋸で曳かれるようであつたそうにして、今でもそのことを思うとゾツとする申します。それから長浜病院で切開して貰うことになり、二週間入院しました。それ程の病氣になつて苦しんでいて、一命も或はむずかしからうと、医師も申しました。が、それでも自分は死ぬるといふことを、更に氣にかけな

苦しい顔をして突然とあらわれて来て、疾風の如くその友人の肩をつかんで、何とも訳のわからぬことを云うて訴えた。そこで友人は近角君ではないか、君その有様は何事だというて慰めんとしたら、直に夢が醒めたということであつた。それが丁度私が松島にあって苦悶の最中であつた。

さて私は松島の講習会を終えるや否や帰路についたが、その時はあたかも黒雲の中を押し分けて行くような気持であつた。それから東京へ帰つて一晩泊まつて、翌日直に尾張へ向つた。そして友人の寺を尋ねたら、友人が私の顔を見るなり、アアこれであつたと、無言の間に深き同情を注いで、大層慰めてくれた。しかるに私は夢の中で遇つたと同じように、訳の解らぬことをいうて、まるで氣違ひであつたと申すことです。そこに二晩泊まつて自分の家へもどつたが、イツでも喜色満面で帰省するのは大いに趣きを異にしていた。

物を食うても黙っている、何を話しかけてもしっかり挨拶もせぬ。そこで親が叱つて見たり、慰めて見たりしてくれたが、一向に効がない。八月に及んでは苦悶の頂上であつた。一つの小座敷の中を足を爪(つ)ま立ててキリキリ舞うて居つた。この時、大無量寿經の五惡段の一言一言が皆私のことを書いてある如く感じた。

んだ。

唯自分の浅間しく罪の深いことのみを苦に病んで、どうか善い友人をほしいとばかり思つていた。病氣が少しく快くなつて病院を出たときは九月の十五日である。その後十七日に、初めて病院へ切り口を洗いに往く途中、車の上で、自分は罪の塊りである。実に極悪である。自分は生きていけるというのは、名前ばかりで、実はこの途中の石塊とあまりかわりはないと思つて、淋しく味氣無うてたまらなかつた。

それから病院から帰り途に、車上ながら虚空をのぞみ見た時、にわかに氣が晴れて来た。これまで心は豆粒の如く小さくあつたのが、この時胸が大いに開けて、白雲の間青空の中に、吸い込まれる如く思われた。何だか嬉しくてならんで家へ帰つたが、叔父が私の顔を見て、どうしたのか、一時に顔が變つたと、大層よろこんでくれた。

それから私は、つくづくと考えて、大いに自分の心に解つて来た。永い間、自分は眞の朋友を求めて居つたが、その理想的な朋友は仏陀であるということが解つた。人間の世の中に向つて、眞の朋友を求めたのはあやまりであつた。実に世の中というものは、こちらが一寸へだてれば、先方も一寸へだてる。二寸疑えば、向うも二寸疑う。たと

え表面には少しも様子をあらわさずとも、心の中に於いて、こちらよりへだてれば、こちらよりへだてただけ、それだけ向の方からもへだててくる。

かくの如く人の心というものは感応するものである。しかし善い人間と、悪い人間とつきあっているときは、善い方にひきつけるか、悪い方に引きつけるか、どちらかである。しかるに善い方は悪い方に必ず負けてしまう。はじめ一度二度は我慢して、人を善くせんと考えても、凡夫同志では、自分が他人を善くすることも出来ねば、他人がこちらを善くすることも出来ぬ。ただ互いに悪い方へ悪い方へと引き落とし合っているばかりである。

しかるに仏陀は、こちらが悪ければ悪いほど、いじらしく思うて下さる。こちらがへだてればへだてるほど、仏陀は胸を開いて迎えて下さる。こちらが悪く思えば思うほどいよいよ善く遇して下さる。こういう御方がましますということを知らずに、今まで心を苦しめて居たのは浅聞しい。仏陀々と云うておりましたが、仏陀はわがための真の朋友であることは、一向気づかなんだ。しかるにかようにわが真の朋友は仏陀であることを、ひとと我胸に感じ来たつてからは日に増してありがたく感ぜられて、十月に入つては、人に対して懺悔話をして、仏の慈悲をありがたく喜ばせて貰うことになりました。此時の感じを三十二年の

## 業と縁

業の世界は暗い。私は業という言葉聞けば暗い感じが起る。「私は業が深い」などと他人様に向かって云ったことは殆んど無いが、それだけに私の腹の底には自分は業の深いものであるという黙々の感じがひそんでいる。

業というのは自分が不知不識の裡に積み来たった久遠劫来の生命の動きの集積である。宿業という。宿業は私を動きのとれぬものになっている。今日の私は宿業に動かされてゐる。兎の毛、羊の毛のさきにいるちりばかりも造る罪の宿業にあらずということ無し。歎異抄にあるとおりである。業の世界において私は暗きより暗きを辿っている。私は宿業の獄囚である。

生れて八十年は過ぎた。その間のことを回想してみても私が宿業の獄囚であることがわかる。煽(おだ)てられるればすぐにお調子に乗るといふ軽薄な性格、父母に不孝の限りを尽くしながら一かど親孝行者と思いがっていた私、結婚の当時は数年ならずして妻を幸福にする空想していたのに、五十余年の結婚生活の揚句は妻を苦惱のどん底生

始めに『静観録』に表白したのが、彼の『信仰の余瀝』の最初の、宗教的同朋の一章であります。

### パスカルの言葉

「真の善というものは、万人が同時に所有することができず、しかも減少することもなく、羨望をおこさせることもない。そして何人も自分からなくさぬ限り決して失うことのない、そういうものでなければならぬ」

○

「人間は誰でも皆幸福であることを求める。それは例外なしである。どんなにちがった手段を用いても、人間は皆この目的を目ざしている。ある人々を戦争に行かせるのも、他の人々をそこに行かせないのも、同じく幸福を願う心からで、ただ考え方がちがうというだけである。

人間の意志はこの目的以外に向つてはすこしも動かないこれこそすべての行動の動機であつて、首をくくりにくく連中までがその例にもれない。だがしかし、何千年の昔からいまだかつて何人も、信仰なしには万人が絶えず目ざし望むその一点に到達したためしがない」

## 福島政雄

活におとしられている現実、教育についての考えをもっともらしく発表しては子供らをよく導いて行きそうに想われた者が、事実は子供に対する理解が甚だ乏しいという現状、これらを総合して見れば「右メめて地獄行き」という断を下されても不服をとなえることは出来ない。

宿業である。運命ではない。運命であれば責任は他にある。宿業となれば全責任は自分にある。自業自得！そして現在の煩惱が烈しいにつけても久遠劫来ということが我が身の現実であることを感ずる。

二十歳の頃丹精をこらして菊を育てていた父に対して冷やかな言を吐いたこと、二十八歳にして結婚の前には様々の難かしいことをならべてさんざんに父母を苦しめたこと、母が亡くなってから妻を父の許にやってよっぽど親孝行でもしたつもりでいて、実は父に対して反感をいだいていたこと、父の臨終前に父に対して少しも温い心を持たず、父をさびしがらせて、心は西洋留学のことの方に飛んでいたこと、是等のことを今にして回想して見ると、自分



が人間として許されて八十歳まで生きていることが不思議である。

まだまだある。四歳で亡くなった長女和子が生きていた時、或る朝和子は父のお汁椀にふたがしてあるのを見て、自分のお椀にもふたをほしがった。その時私は和ちゃんはお椀のふたなどいらなと言った。和子は悲しんで泣き出した。

一事が万事である。此の事は人間としての私が如何に人間らしくないかを物語る。妻は私を批評して非人情であると言っていたが、此の頃では人情が全く無い、鬼のような者だと言う。ひどいことを言うと思うけれども、現実の私はそんなものであろう。自分にはわからない。八十余歳の私は今までに多くの知人や知友の死に会っているが、お悔みに行ってお棺の前に泣き伏したことは二度か三度ほどしかない。

此の宿業深い私が、二十六歳の夏から仏縁に値遇している。縁といえは明るい世界である。まして仏縁といえは無量寿経の光顔魏々の世尊の御縁が第一であって非常に明るい。しかも私が仏縁に値遇したのは私の煩惱によるものである。廿六、七歳の頃青年期末期の私は、一方では教育の上で教育者として愛の理想を高調していたのが、実は女性に対する愛欲の変形であったということが後にわかった。

外はない。愛欲、無慈悲或は非人情の私はそのまま八十歳を超えている。業の世界の私はあくまでも暗い。併しその暗い業海に五十余年来一道の光明がさしそめている。仏縁は否定し難い。永遠の黎明というか、そこにお念仏がある。此頃の私は八十年の罪業を省みる毎に「一生悪を造れども弘誓にもうあいぬれば安養界に至て妙果を証せしむ」という正信偈のお言葉が胸に湧いて来るのを感じる。

(昭和四十六年六月廿四日再考改録)

### 法然上人語録

ここにわが如きは、すでに戒定慧の三学の器にあらず。この三学の外に、わが心に相応する法門ありや。わが身にたえたる修行やあると。よるずの智者に求め、もろもろの学者にとぶらいにしに、教ゆる人もなく、示すともがらもなし。(聖光房に示されたる詞)

善導勸化の観經四帖の疏「一心専念弥陀名号 時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是を正定之業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」の文にいたってその支意を得

「歡喜のあまり聞く人なかりしかども、予が如きの下機

その愛欲ゆえに結婚問題について父母を苦しめ、自分も苦しんでいたのが、近角常観先生の夏期求道会の御講話で阿闍世王のことを承っているうちに心機一転したのである。深い宿業の私に仏縁が開けて来たのである。私は不思議に思う。それまでの私は日蓮上人の御遺文を読んだりして念仏ということをも最も軽蔑していたのに、その私が念仏称名するようになった。これほどの不思議はない。

尤も二十六歳の心機転換というのは第一歩の道が開けたというだけである。その後五十余年、躰きだらけの生活を続けているが、それでも四十二三歳の頃から白杵祖山先生と法華経の長者窮子(ちょうじゃくうじ)との御縁で、生みの親というものの本当のいのちがわかり始めた。不孝者が親心というものに本当に感ずるようになった時には、両親ともに此の世には居なかった。ただ念々相続の裡に仏のお慈悲と生みの親の真実とを一流れに感ずるようになった。此の世を去った親は不断に私にまことのいのちをそそいでいる。私は仏陀から親を通して私にひびくまことの中に生きている。

仏陀のお慈悲をいただいている私に、それでは慈悲の心が動くか、私が慈悲ある父親となっているかと云えば、なかなかそうは云えない。その事は五十余年私を見守っている妻が、前に述べた通り宣言している。私は恐縮するより

の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねてさだめ置かるるをやと、高声に唱て感悦隨に徹り、落涙千行なりき」

(聖覚法印に示されし御詞)

われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に生まるることを示さんがためなり (勅修御伝)

悲しき哉や、善心はとしどしに従いて薄くなり、悪心は日々に従いていよいよまさる。されば古人のいえるあり煩惱は身にそえる影、さらむとすれども去らず。菩提は水に浮べる月、とらむとすれどもとられずと。(往生要義抄)

聖道の修行は智慧をきわめて生死をはなれ、浄土の修行は愚痴にかえりて極楽にむまると。(諸問答)

#### 一 道会 御案内

時 十月二十四日 午後一時

所 京都市右京区山田開町 浄住寺

道筋 京都駅より叡寺行バス、終点下車

新京阪、桂駅乗りかえ、上桂下車

念 仏 詩 抄 (五)

木 村 無 相

冬 晴 る る

遠きやまなみ  
雪にかがやき  
われ今ここに  
いのち生くる

今日ひと日

ひと日のいのち

冬晴るる

ナムアミダブツ

やみはひかりを しらざれど  
ひかりはやみに いらたもう  
そのみひかりの みほとけを  
ナムアミダブツと よびまつる

た と い

「たとい法然上人に

すかされまいらせて  
地獄におちたりとも

さらに

後悔すべからずそうろう」

たとい親鸞聖人に

すかされまいらせて  
地獄におちたりとも

地獄におちたりとも

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

自力も他力も

どういとおひとが  
となえても  
どういきもちで  
となえても

チラチラ

わたしは

ナムナム

わたしが

小雪か

小雪が

わたしか

天地いっばい

ナムアミダブツ

チキルとハイド

誤解されたと  
おこるなよ  
正解されたら  
こまる身と  
おしえてくれし  
ナムアミダ

チキルとハイドの

わが身なれ

チキルとハイドの  
わが身なれ

教行信證をひもときますと、大無量寿經を中心に沢山の

經典を引用され、また七高僧の解釈や其他の高僧方の言葉が沢山引用されていて、聖人御自身のものは極く僅かであります。これは「親鸞私なし、如来の教法われも信じ人にもおしえきかしむるのみ」という御徳風のおのずからなあらわれであろうと一応考えておりましたが、それはそうではありませんけれど、聖人が引用された御文は、そのまんま聖人御自身の言葉があるということに最近フと気づいて驚いておるのであります。たとえば、經典にこうあるといわれた時、そのまんま聖人は身にうけていられ、龍樹菩薩がこう云われ、天親、曇鸞、善導の諸師の御文はこうであるという引用されているまんま、それが聖人の信境であるのです。それですから、教行信證で聖人は御自身のことばかりを述べていられるとも感じられるし、一面また、弥陀、釈迦、七祖聖人のことだけを記していられるとも云えるのであります。

それについて歎異抄の総結文の中に有名な信心一異のこ

とがあります。

「……親鸞御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり。そのゆえは、善信が信心も上人（法然）の御信心も、ひとつなりと仰せそうらいければ、勢観房、念仏房など申す御同朋達、もてのほかにあらそいたまいていかでか上人の御信心に、善信房の信心ひとつにはあるべきぞとそうらいければ、上人の御智慧才覚ひろくおわしますに、ひとつならんと申さばこそ、ひがことならぬ。往生の信心においては、またく異なることなし、ただひとつなりと御返答ありけれども、なおいかでかその義あらんと、この疑難ありければ、詮ずるところ、上人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげければ、法然上人の仰せには、源空が信心も如来よりたまわたりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり、さればただひとつなり。別の信心にておわしますさんひとは源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまひそうらわじと、仰せ候……」

と、あります。これこそは、十悪、愚痴の身と信知せられて選択本願の念仏を「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔かねてさだめおかるをや」と随喜された法然上人と、内は愚にして外は賢なる、愚禿の身に「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」としられていよいよたのもしくおほゆるなり」と感佩（かんぱい）される両聖の師弟のおのずからに軌を一つにされたお姿であります。

そうした信の開けた正門として、歎異抄の二章に

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう……」

と、よき人法然上人の仰せのままが親鸞聖人の信心となつているのであります。本誌の中に「聖人に親灸して」を掲載させて頂きました池山先生の信も、この御文がそのまま池山先生の信の扉を開いたことを表白していられます。それは同時に私共一人一人のことになるのであります。聖人は、さらに二章の末文に、

「弥陀の本願まことにおわしますば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしますば善導の御釈虚言したもうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらことならんや。法然の仰せまことならば、親鸞がもうすむねまたもてむなしかるべからずそうろうか」とある。これらこそ、仏凡一体の信味であり、師弟一味の妙境の自然な流露であります。

釈迦・弥陀二尊の仰せがそのまゝ、聖人に徹して信心の華とひらけ、三国七高祖の御釈を体解（たいげ）し翫味されて、それがそのまま聖人の言葉となつてゐる事実には、唯驚歎し随喜するばかりであります。

こうした聖人の御述作の御こころの源泉に参じて、再読三讀いたしますとき、教行信證や御和讃その他に聖人がご引用された仏語や高僧方の師釈がそのまま金言実語として異様にひかりかがやき、生きた言葉と感佩させられます。

先日、ある学者の方が「聖人が教行信證などに御引用された言葉が、聖人独特の読み方になっていきますが、その場合、従来はこう読んできたが、これはこう読むのが本当と思つていうようになぜ註釈なさらぬのでしょうか？」とたずねられました。これは学者の方としては当然のおたずねでありまして、昔、華嚴宗の傑僧、鳳潭が、聖人の教行信

証を読み、「親鸞は自分勝手な無茶な読み方をしている」と酷評した由であります。たとえば大無量寿経の一番大切な願成就文(がんにょうじゅもん)、浄土真宗の基盤ともいべき御文を「至心に廻向して」と従来読まれていたのを「至心に廻向したまえり」と、真実の廻向心のおこらぬ我等凡愚に、如来がかねてしろしめされて御廻向下さるのであると、廻向の転換を明らかにされました。又善導大師の四帖の疏(そ)の中の至誠心釈で「内に虚仮をいだいて外に賢善精進の相を現することを得ざれ」と、内も外も真実なれと書かれているのを「外に賢善精神の相を現することを得ざれ、内に虚仮をいだけばなり」と訓(よ)まれたことも破天荒のことです。しかし聖人にしてみれば、そう頂くことが仏や高僧方の真意であり、御自身の体験も全くその通りであるとの確信、否、信心の智慧からひらける自明の真実として、何の註釈も無用であったと信じっております。

このことに関連して、面白い例をあげますと、かつて私は良寛和尚の歌を読んでおりましたら、古歌とほとんど同じと思えるものもあり、また師匠の道元禅師の歌と相似するものを知りました。

春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷しかりけり

ゲエテは「言葉と信仰の宗教から、心と行(おこない)の宗教になって行くものである」と云っておりますのはそのうした消息を云ったのでありましょう。

しかし京大名誉教授の平沢興氏が「すべて聖人の言葉を聞いておぼえることは容易であるが、聖人が色々の御苦勞の中から金の卵が生れるように自然に体得された上の言葉を、私共の体験として読めるようになるには、何年、何十年とかかるものだ」と云っていられます。これは私共が唯聞き覚えて、それに一応の解釈をしてわかったつもりで、ごし勝なことへの大きな警告であり、聖人の仰せは理解、身読でなければ何にもならぬことを省みさせられます。

ここで思い併せまことは、親鸞聖人は仏法を身にうけていられることとあります。もとより聖人の仰せのすべてはそうしたところから出ているのでありますが、それを特にひろいあげましょう。

歎異抄二章に「いずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」、「詮するところ愚身の信心におきてはかくのごとし」

全上九章に「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られていよいよたのもしくおぼゆるなり」

全上総結文に「親鸞一人がためなりけり」「そくばくの業を持ちける身にてありけるを」とあります。

の禅師の歌に対して、良寛和尚に  
形見とて何か残さん春は花、夏ほととぎす、秋はもみぢ葉  
— というのがあります。これはどうしたことだろうかと長  
年不審に思っておりましたが今回それも氷解いたしました。  
良寛さんは恩師のこの歌を聞いて何時も思い浮べてい  
られたのでしようが、はじめの間は、これは師の歌であ  
り、心境であると、ひとごとと感じていられたのが突如と  
して良寛さんの辞世にあたって、それがそのまま良寛さん  
の体感、実証としてひらけ、その師の仰せが良寛さんの言葉  
として何の抵抗も矛盾もなく流露したのであります。

このことは私共も聖人の流れを汲まして頂くありがたさ  
には、同じ味わいを恵まれるのであります。たとえば聖人  
の常の仰せ

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親  
鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける  
身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願  
のかたじけなさよ」

につきましても、はじめは聖人のひとりごと、くりごと  
とひとごとにお聞きしておりますが、そのうちに、自然に  
「わたし一人がためなりけり」と、身心に徹透し、聖人の  
この常の仰せが、そのまま私自身の言葉とさせていただけ  
るのであります。

唯円房はこの仰せをうけて、善導大師の「自身はこれ罪惡  
生死の凡夫、脇劫よりこのかたつねに沈みつねに流転して  
出難の縁あることなき身としれという金言にすこしもたが  
わせおわします。さればかたじけなくも、わが御身にひ  
きかけて、われらが身の罪惡の深きこともしらず如来の御  
恩の高きことをもしらずしてまどえるを思いしらせんがた  
めなり」と随喜し讃仰しています。

さらに御晩年の作、愚禿悲歎述懐和讃に、  
「虚仮不実のわが身にて」  
「奸詐もはし身にみてり」  
「無慚無愧のこの身にて」  
「小慈小悲もなき身にて」

と、繰り返していられますことも、聖人が文字通りに仏  
法を身にうけて、わが御身にかけたのお導き下さっており  
ますことは、謝してもつきぬ御恩と存じます。



# 円朝忌に思う

## 聚墨記

八月十一日は、落語界の名人と讃えられた三遊亭円朝（一八三九—一九〇〇）の祥月命日にあたります。この日は演劇界をはじめ各界の名士が集って円朝忌が盛大に営まれたことでしょう。円朝は幕末から明治のはじめにかけての落語界の名人で綿密に調査した史実で自作自演していませんが「牡丹灯籠」は、口演落語速記の皮切りで、近代文学へはなし言葉として影響を非常に与えました。

さて円朝が名人として、深い芸に到達しましたのも山岡鉄舟居士（こじ）の懇切な導きがあったからであります。円朝は遺言して、自分を鉄舟居士の墓地に葬り、何時までも居士に仕える姿をのこしました。

さて、円朝と鉄舟居士との出会いは次のようだったと聞いております。鉄舟居士は禅剣一致の極処を体得した人でありますが、その師匠の京都の天龍寺の滴水老師が或日東京に来られました。そこへ鉄舟は当時すでに世間で有名になっていた円朝を呼んで

「私は幼い時に母から桃太郎の話聞いてなつかしい。

とさとされ、爾来根気よく居士に参見し、二年後に大いにうるところがあって、桃太郎を語ると

「ウン、今日の桃太郎は生きてるぞ」

とほめられるまでになった。のちに滴水老師は「無舌」の居士号を円朝にあたえた。

円朝が自作自演の名作の一つ「真景累ヶ淵」の中に

「ごく大昔に断見の論というのがある、目に見えないものは無いに違いない、と説きました。するとそこへ釈迦仏が出て、お前の云うのはまちがいだ。それに一体無いという方が迷っている、と云い出したから、ますます分らなくなりました、

「へエ、それではあるがないので、無いのが有るのですか？」というと、

「イヤ、そうでもない」

というので、つまりどちらが確かかわかりません。私共はどちらへでも、知恵のあるお方が仰しやる方へついて参りますが……。

つまり悪いことをせぬ方には、幽霊というものは決してございませぬ。人を殺して物を取る、というような悪事をする者には、必ず幽霊が有りまする」

こうした言葉の中に名人としての風格がしのばれる。又こうした心境から語り出される落語は、聞く者の心を温

この席で桃太郎を語ってくれ」

と注文しました。話が終りますと、滴水老師は一言

「矢張り舌だけの話だ」

とつぶやかれました。円朝はこの批評を聞いて如何にも不服であったが、鉄舟居士は別室に円朝を連れて行って、

「お前は老師の教誨がわからぬようだが、よくきけ、舌だけの話とは、わしがここでお前の舌を切り取ったらどうするか」

「それは困ります。話家に舌がなくなれば飢え死です」と答えましたので、すかさず

「わしは浅利師範から一刀流の皆伝をうけたが、今は無刀流になった。剣の極処も無刀にある。話の極処も舌のいらぬところ、無舌の境に達せねばいかぬ……」

今どきの芸人は喝采されるとすぐ名人気どりになる。昔は自分の芸を自分の本心に問うて修行した。しかしいくら修行しても俳優ならその身をなくせぬ限り、落語家ならその舌をなくせぬ限り本心は満足せぬ……」

め、洗い、明るくしたことであろう。

仏語に「香光莊嚴」という言葉がある。徳の香りが光となって四辺をかざることであるが、円朝にはこの香光がある。しかしこれも円朝が人間としてすぐれていたということとでなしに、その心底に仏心が開華していたからである。人間のえらさとかかしこさというものは、どんなにすぐれていても五十歩百歩の差である。

さて、畢生の恩師、山岡鉄舟居士が胃ガンが悪化し、その最後の夜、有縁の人々が群参して病床に侍した。しかし手のほどこしようなない重態であったが、沐浴してかねてから用意していた白衣を着て、ガン性腹膜炎とて腹がはりきって横臥も出来ず、布団にもたれて苦痛に堪えていると、見舞の人々は言葉もなく、時々あちこちに歎息がもれるのみであった。

鉄舟居士は、見舞に来ていた円朝を呼び、こんな時に桃太郎の落語を語って、皆の者を笑わせよ、と頼んだ。後日円朝が「あの時ぐらい苦しいことはなかった」と述べていたそうである。

☆ ☆ ☆ ☆

あ

とがき



池山先生の御忌月を迎えますので「仏と人」から「聖人に親灸して」の一文を頂きました。第五巻に一度頂きましたが再録させて頂きました。御長男の寿夫様が「父は信の友と無言のまま時をすごすことがあった、しかし父と来客の外に今一人の方がいられて、父も客もそのお方と問いつ答えつして念仏裡にすごしていました」と語られました。聖人に親灸して「一人居てよろこべば二人と思うべし、二人いてよろこべば三人と思うべし。その一人は親鸞なり」の御臨末の書を文字通りお味わいになられた方でした。

又近角先生の懺悔録中の中心「予が信仰の経過」を頂きました。その人の生活のありのままの記録はその人にとって聖書であるということをかかって聞きましたが仏法を身にうけられた尊い記録は弘共の灯炬となつて下さることであります。

福島先生の「葉と縁」は私は、親鸞聖人の愚禿悲歎述懐和讃に通じるものと頂きました。後悔は暗く、懺悔はあかるいと云われます。悪夢にうなされてる時は、冷汗を流して苦しみますが、その夢がさめる

と、恐ろしいものも、逃げる自分も皆夢であつたと知らされず。そこには苦しみが残りません。仏の智慧光に照らされ、大悲の善巧にあずかつてはじめて自分の姿が知らされますがそこは明るい光明下であります。聖人の悲歎述懐を拝読すると虚仮不実、蛇蝎奸詐の身と述べられて文字は暗いのですが、読む弘共にしこしの暗さも感じませぬことは真の慚愧の声であるからです。

木村さんの「念仏詩抄」を頂きました。この詩を誦しながら何時も若くして死んだ八木重吉の詩を思い併せませす。

もつたいなし

おんちちうえと、とのうるばかりに

ちからなく、わざなきも

たんたんとして

いちじょうのみちをみる

師弟一味は、聖人の内に七祖を觀じ、仏光を仰ぐにつけ聖人のお言葉は世間語であつて世間語でない、そしてそのまま弘共の言葉となつて下さる不思議さを誌しました。御判読下さい。

三遊亭円朝は、落語界の名人として慕われる人ですが、単なる話上手でなく、所謂、無舌居士の面目を体得した世に稀な人であります。念仏の上で申せば、非行非善、無義為義の世界を知らされるもので、かつて記録していたものをせました。他山の石もって我石を磨くべしとか、何かの御参考にして下さればさいわい입니다。

### 御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、南区駈上町二丁目八十八、一道会館、一道会例会。

○ 市電、新郊通り一丁目下車、東入る三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午後。昭和区小椋町、教西寺法話会。

○ 市電、御器所通り下車。市バス、北山町下車。

○ 但し十月は都合で教西寺法話会を休みます。京都一道会出席のため。

定価 半年 四〇〇円 (送共)  
一年 八〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知奥西加茂郡三好町大字福谷

印、刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番  
郵便番号 四五七

慈光第二十三卷 第十号 昭和四十六年十月十五日発行 (毎月一回・十五日発行)  
昭和二十三年七月二十六日 第三種郵便物認可